



Subaru

男声合唱団

ニュース No.356

'12. 05. 15

感動で涙が・・・ 昇に入りたい の声

平和のつどい・守口9条の会で公演

5月12日



□「平和のつどい・守口9条の会」が5月12日（土）14時から守口市教育文化会館で催され、「昇」は会の冒頭で演奏、好評を得ました。

□12時に集合し、吉田さんの入念な体操の後、本並先生のヴォイストレーニングと指揮、森さんのピアノでリハーサルを行いました。2曲は伊藤さんの指揮でした。

□公演曲は、本並先生の指揮で、「春を待つ」、「白樺」、「芭蕉布」、「天の火」、「なぜ」、「おらあこごがいい」、「故郷の四季より」、伊藤さんの指揮で「歓びのナーダム」、再び本並先生の指揮で「フィンランディア」、アンコール曲の「川の流れのように」は再び伊藤さんの指揮で歌いました。参加者は全26名でした。

□司会は岡邑さんで、簡潔でこの催しにふさわしい訴えのある内容で好評でした。昇の団員拡大の「どんなとこ？コンサート」の宣伝も、「2013日本のうたごえ・おおさか」の大音楽祭の宣伝も上手に訴えました。

□天井の低い会場なので声が大きすぎるぐらい響き、迫力のある演奏になりました。岡邑さんのところに、「昇よかった」「感動で涙が出た」などの感想が寄せられました。

□また、うれしいニュースで、学校の先生で1人は入団したい、もう一人の先生は入りたいが今ちと忙しいので定年になったら・・・という声がよせられました。

□時間のある人は近くの食堂？で反省会をしました。

帰りの京阪守口駅前広場で「守口市だんじり祭」の前祭で「地車囃し（だんじりばやし）大会」をやっていました。鐘と太鼓だけの軽快な囃しに乗って若い娘や子どもたちも振りをつけていました。模擬店からおでんやイ力焼きを買って、また一杯。（橋本、三村）



3. 11被災生徒に届ける

村嶋由紀子さん、檀さん、

5月11日

また「毎日新聞」に載りました

9

社会

3版 2012年(平成24年)5月11日(金)夕刊

每 日 新 聞

1.17と3.11



「震災新聞」を改めて冊子にまとめた村嶋由紀子さん（左）と紀久男さん

神戸の元教師が冊子化

南中の校舎では約500人が犠牲になり、身近な人を亡くした生徒も多かった。新聞は95年夏、被災体験の風化を防ぐ目的で企画。B4用紙一枚に1人ずつ記事を書き、翌年1月17日付で発行した。

南中の校舎では約500人が犠牲になり、身近な人を亡くした生徒も多かった。新聞は95年夏、被災体験の風化を防ぐ目的で企画。B4用紙一枚に1人ずつ記事を書き、翌年1月17日付で発行した。

母親を亡くした男子生徒は、支えにしている言葉をえんでいた。村嶋さんは「書くこと」で気持ちを整理できた生徒もいた。友達に経験を知つてほしい、という思いがあることも分かった」と振り返る。冊子にまとめ、卒業式で生徒に配った。

した。
今月15、16日に陸前高田市の中学校や市教委に届ける。将来は広く被災地の学校に送りたいという。

村嶋さんは「子どもは復興を支える力。少しでも心に寄り添って乗り越える力に変えてほしい。神戸の経験をその指針にしてもうえたら」と話している。

東北に経験配達

SHINSAI

震災新聞

阪神大震災(95年)の翌年、神戸市立本山南中(同市東灘区)の3年生200人が体験や思いをつづった「震災新聞」を、当時心のケアにあたった元教諭、村嶋由紀子さん(64)=兵庫県芦屋市=が16年ぶりに冊子にまとめた。東日本大震災後に被災地で知り合った遺児と、神戸の生徒たちの姿が重なり、思いついた。「子どもたちの経験を伝えたい」。近く岩手県陸前高田市を訪れ、学校関係者に届ける。

【藤顕一郎、写真も】

に生命を絶たれていた人。一瞬にして大切な生命がうばわされていった。悲しみさえ感じなかつた。

昨年11月、夫で声楽家の村嶋紀久男さん(65)と2人で、陸前高田市でコンサートを開き、車両で面見う家

に生命を絶たれていた人。一瞬にして大切な生命がうばわられていった。悲しみさえ感じなかつた。

震災当日、看護師の母親の働く病院で、救助活動を手伝つた女子生徒の言葉だ。

学校の帰り、電車を待つているとなぜかかなしくなるときがある。そんな時に思い出す父の言葉。「おまえかわいそうになあと言わるより、おまえがんばつどうなあ」と言つるほうが

昨年11月、夫で声楽家の村嶋紀久男さん(65)と2人で、陸前高田市でコンサートを開き、津波で両親から家族4人を亡くした熊谷海音さん(8)と出会った。「天国の家族に聞かせたいから」とステージ上で歌う海音さんの姿を見て、同じように悲しみを乗り越えようとしていた教え子たちを思い出した。